

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成8年度・国庫補助調査)

柳本遺跡群アンド山地点

長寺遺跡(第15次)

成願寺遺跡(大和古墳群)

1997

天理市教育委員会

例 言

1、本概要報告は、天理市教育委員会が平成8年度におこなった国庫補助による埋蔵文化財調査の報告書（概要報告）である。

2、本概要報告に記載する遺跡名は、下記に示す。

柳本遺跡群アンド山地点	天理市柳本町1529-1
長寺遺跡（第15次調査）	天理市樺木町2053-5他
成願寺遺跡（大和古墳群）	天理市城願寺町330-4

3、発掘調査および遺物整理については、下記に担当者と補助員の氏名を記し、発掘に際しては、地元の方々に協力を得た。

柳本遺跡群（アンド山地点）

担当者	青木勤時
調査補助及び整理補助	西山陽子（堺女子短期大学卒業生） 清岡廣子・八重樫由美子（天理大学学生） 中山玉生（京都橋女子大学学生） 田中涼子（天理大学卒業生・現高知県文化財埋蔵文化財センター）

長寺遺跡

担当者	松本洋明
整理補助	宮北晴美 中森軍之助 中森富美子
成願寺遺跡（大和古墳群）	
担当者	松本洋明
整理補助	宮北晴美 中森軍之助 中森富美子 山田光子

4、本概要報告書の執筆は、それぞれ担当者がおこない。編集は、松本洋明・青木勤時がおこなった。

目 次

柳本遺跡群 アンド山地点

I はじめに	1
II 調査の概要	1
1. 調査の方法と経過	1
2. 北トレンチの調査	2
3. 南トレンチの調査	3
III まとめ	10

長寺遺跡（第15次調査）

1. はじめに	13
2. 調査の結果	14

成願寺遺跡（大和古墳群）

1. はじめに	16
2. 調査の概要	16

柳本遺跡群アンド山地点の調査

I はじめに

天理市南部の東山麓沿いには多くの前期古墳により形成される大和・柳本古墳群が展開し、その周辺地域においてもそれら古墳群の築造に関わる集落群の存在が想定されることが知られている。実際には、当該地域一帯には広域な古墳出現前後期の遺物散布が認められているにも関わらず、幾つかの遺跡が周知されているに過ぎないのが現状である。当報告の対象であるアンド山地点については、1980年度（昭和55年）の崇神陵西側のアンド山古墳近接地における奈良県立橿原考古学研究所の調査（泉 1980）で古墳前期および中世の土器類が出土しており、やはり前述の集落遺跡群に内包される一地点としての認識がもたれた。そのため今回の調査地についても柳本遺跡群アンド山地点として調査を進めた。

今回の調査は、天理市柳本町1529-1番地、字藪ノ東、滝八王寺、宮ノ北にかかる地点における宅地開発に伴う事前調査として実施した。現地における調査は平成8年5月8日より開始し、同年6月13日にすべての調査に係る作業を終了した。総調査面積は約120㎡であった。



図1 調査地位置図 (S=1/5000)

II 調査の概要

1. 調査の方法と経過

南北に延びる狭小な調査対象地が東西に位置する道路により分断されていたため、南北それぞれの地点に調査区を設定して発掘調査を進行した。南トレンチについては重機による表土層の掘削の後に、また、北トレンチでは重機の進入が困難であったため当初より人力掘削のみによる排土処理を主として調査を進めた。

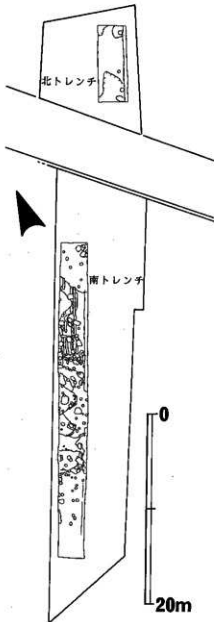


図2 調査区位置関係図 (S=1/400)

土坑の上部にはトレンチ南半を覆う第II層の落ち込みが重複しており、その堆積過程の中で土坑の上部が削平されたことが窺い知れる。

土坑 SK01出土土器

1はやや下膨れ気味の球形胴部を有する壺形土器である。外面は磨滅のため調整不明であるが、内面にヨコ、ナナメ方向の板ナデが施される。底部はやや上げ底気味に作られ、底部径8.8cm、現存高7.8cmを測る。淡橙色の色調で焼成はやや軟質である。

2. 北トレンチの調査

(1) 層序

北トレンチにおける基本的な層序は以下の通りである。

第I層：黒褐色砂混じり粘質土 層厚20～30cm。地表面の標高値は86.2mを示す。最近に至る耕作土である。

第II層：にょい黄褐色細砂混じりシルト～砂質土 層厚30cm前後。北トレンチの全域を覆うように傾斜をもって堆積する。若干の古墳前期、中近世の微細な土器片を包含する。

第III層：褐色砂礫土 親指大から拳大の礫を含み硬質な堆積土壌である。遺物はまったく含まれず、上面において土坑、小穴等を検出できたことから地山面として認定できよう。内容的には基盤層とは考え難いが一応の生活面が確認できたことからこれより下位の層序確認は実施しなかった。

(2) 検出遺構と出土遺物

土坑1基と小穴3基、それにトレンチの南北両端で第II層の落ち込みを3ヶ所検出している。いずれも遺物の目立った出土は見られず時期の特定はできないが、土坑SK01のみ壺形土器の底部から体部下半にかけて完存する破片が出土しており概ね古墳前期初頭に帰属することが理解できる。以下、土坑SK01についてのみ詳述しておく。

土坑 SK01

北トレンチの南東隅で検出している東西50cm、南北90cm程度の長円形土坑である。断面形状は浅い半円形を示し、埋土はにょい黄褐色砂混じり粘土である。この埋土の上部で底部を下方方向に土器を正置するような状況で1の壺形土器を検出している。

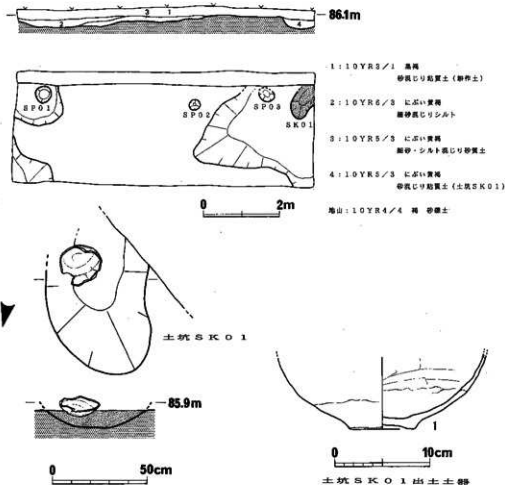


図3 北トレンチ平面図・土層図 (S=1/100)・土坑SK-01遺物出土状況
および土層図 (S=1/20)・出土土層実測図 (S=1/4)

3. 南トレンチの調査

(1) 層序

南トレンチにおける基本的な層序は、基盤層および各遺構面ごとに多少の起伏があるものの概ね以下の通りに理解できる。

第I層：灰黄褐色砂質土。層厚30～40cm。地表面の標高値は86.8m前後で一定している。近現代の耕作土である。

第II層：黄褐色～にぶい黄褐色砂質土。層厚20～30cm。上部は薄く水平な堆積がトレンチ全域に続く。下部では粗砂を含むややにぶい色調の砂質土が下位の層理面の起伏を埋めるように堆積する。床土および旧耕作土と考えられる。

第III層：褐色砂混じり粘質土および砂質土。層厚10～25cm。トレンチ北端を除きほぼ全域に拡がりをもつ。弥生末～古墳前期初頭、中世の土器片を包含する遺物包含層である。

第Ⅳ層：ぶい黄褐色～暗褐色砂質土 トレンチ南半の一部にのみ見られる堆積層である。少量の微細な遺物を含む。

第Ⅴ層：ぶい黄褐色～暗灰黄色砂混じり粘質土 トレンチ南端にのみ見られる。層の中間にシルト質土が介在する。遺物は極僅かに含まれているに過ぎない。

第Ⅵ層：黄褐色シルト～褐色粘質土・粘土 地山面となる基盤層である。

(2) 検出遺構

自然河道、土坑、柱穴、小穴、竪穴住居跡、素掘り小溝、落ち込み状遺構、瓦溜り遺構等の各種遺構を検出している。それぞれの詳細な時間的位置付けについては出土遺物が少ないため特定できるものは少ないが、遺構検出面あるいは層位的な関係により大まかに把握することは可能である。

ここでは、時期的に遡るものから主要な遺構について順に概観しておくことにする。

自然河道 NR01

トレンチの中央よりやや南寄りのもっとも標高値の低いところを西向きに流れていた幅2～3mの小河川である。第Ⅵ層の地山面直上で検出している。埋土は褐色の砂礫を多く含む砂質土で、土器等の出土はほとんど見られなかったがサヌカイト製の石鏃が1点のみ出土している。この遺物により概ね縄文後期頃には埋没し始めていたものと考えられる。

竪穴住居群 SB01～05

トレンチ北半の高まり（尾根筋上）および中央の低地（谷筋上）にかけて分布する住居跡群である。いずれも上面は著しく削平されており方形の平面プランは窺い知れるものの規模等については不明なものばかりである。遺物は各住居より庄内～布留式期初頭の土器片が出土しており、古墳出現前後期の集落内部に該当すると思われる。

掘立柱建物群および柵列

いずれも現状の地割に近い関係で柱穴が並ぶようである。復元案では、北側建物跡が一間×一間以上で南辺に柵列がある。南側建物跡は南北二間の柱穴が連なり、東辺に柵列、南に井戸跡が付随する。明確な時期については各柱穴の出土遺物が少ないため不明であるが、その他の小穴群に切られているものもあるため時期的に中世以前であることには違いない。また、南側建物跡に近接して後述する瓦溜り遺構 SX01があり、その廃棄された瓦類の内容から奈良末～平安初頭に遡る寺院関連遺構であった可能性が考えられる。

瓦溜り遺構 SX01

トレンチの最南端の西隅で検出した瓦類を砂礫とともに廃棄した浅い土坑状の落ち込みである。第Ⅴ層上面より掘り込まれており、短辺50cm、長辺80cm以上の平面規模で深さは約40cmを測る。多量の円礫とともに軒平瓦、平瓦、丸瓦と少量の土師器羽釜、瓦器碗が集積していた。共存する中世土器より廃棄された時期の一端が理解できる。

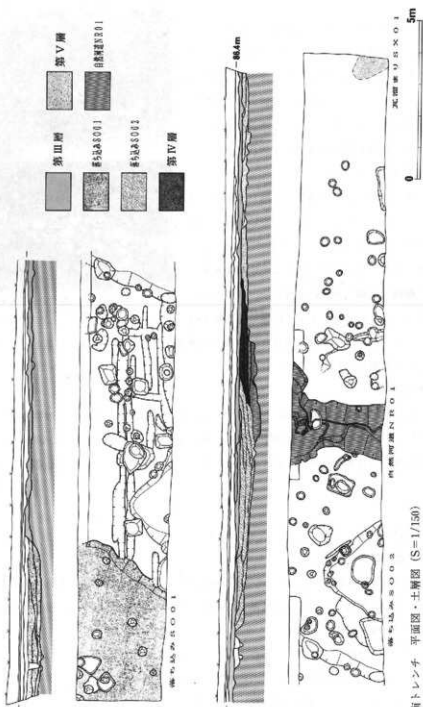


図4 掘トレンチ 平面図・土層図 (S=1/150)

小穴群

トレンチのはほぼ全域に分布する直径30cm程度の小柱穴群である。第Ⅳ層以下の層位の上面で検出されるものがほとんどである。よって層位的には中世前半期までの範囲で捉えることができよう。建物の復元案では当時の現状地形によって左右されたとされる地割から方面地割への建物配置の変遷が想定される。

落ち込みSO01

トレンチ北端で検出した低地部（谷筋）である。底面直上において小穴、柱穴等を検出しているが、第Ⅲ層上面に連続する落ち込み埋土の上面に至るまではまったく遺構は介在しなかった。埋土は上半が暗褐色～黒褐色の有機物と土器片を含む粘砂質土、下半がよい黄褐色の砂質土と粘土質シルトで同様に土器片を含むものであった。埋土上半の出土遺物には少量の中世末～近世の遺物が見られるが、大半は古墳前期初頭と中世前半期頃のもので占められていた。



写真1 南トレンチ瓦溜り遺構SX-01検出状況
上段：南壁 下段：上方より

落ち込みSO02

トレンチ中央部で検出した低地部（谷筋）である。北肩は第Ⅵ層、南肩は第Ⅳ層をベースとしてよい黄褐色と暗褐色の粘質土と砂質土が交互に堆積する埋土の様相を呈する。遺物は古墳前期初頭から古墳後期、奈良末～平安の土器片が含まれる。なお、底面直上では竪穴住居群と小穴群が検出されている。

(3) 出土遺物

南トレンチ出土遺物

2は、中国製輸入陶磁碗の小片である。明代の龍泉窯系青磁碗の口縁部であることが外面の蓮弁紋様よりわかる。浅黄緑色を呈し、露胎部は灰白色である。紋様の特徴から13世紀初頭から前半頭から前半頃の帰属時期が考えられる。

3は、いわゆる庄内壁の体部上半の小片である。外面に左上がりのタキ成形成痕、内面には浅いヘラ削りが見られる。典型的な大和型庄内壁の特徴をもつ。

4は、須恵器の鉢である。外面に横方向にミガキ調整が看取でき、焼成以前の丁寧なつくりが窺える。概ね奈良時代頃のものと思われる。

5は、瓦器碗である。底部付近は完存し、高台を貼り付けた後ナデ調整を加えたのみで終わる編なつくりとなっていることが窺える。内面の見込みにはまばらなラセン状の暗文を施す。現状の編

年研究により、14世紀初頭の時期が考えられる。

6は、砥石である。白灰色の砂岩を用い、使用痕を示す凹面がわずかに認められる。

7は、埴輪片である。外面に細かいヨコハケ、内面にタテハケが施され、土師質焼成のものである。突帯の形状と内外面調整から概ね川西編年IV期に該当し、5世紀後半頃の時期が考えられる。

8は、須恵器である。口縁部のみの破片でロクロ形成痕のみが残る。

9は、小型丸底壺である。全体に摩滅するものの、その特徴を示す外面肩部のハケ、底部付近と内面にはヘラ削り調整を窺うことができる。

10は、布留甕である。内湾気味にのび端部を内面に丸く肥厚させる口縁形態を示す。

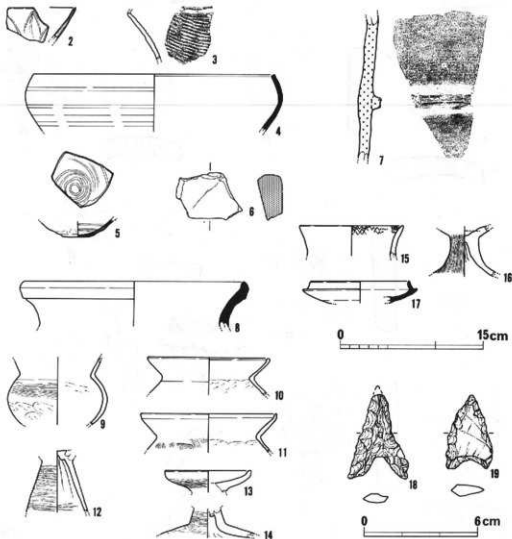


図5 南トレンチ 出土遺物実測図 (土器類S=1/4・石器類S=1/1)

2：第II層 3～7：第III層 8～14：SO-01埋土 15～17：SO-02埋土 18・19：NR-01埋土

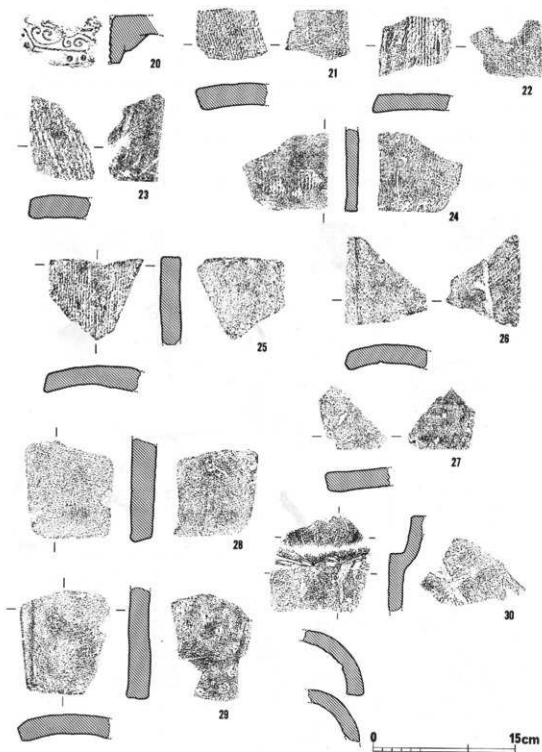


図6 南トレンチ瓦溜まり遺構SX-01出土遺物1 (S=1/4)

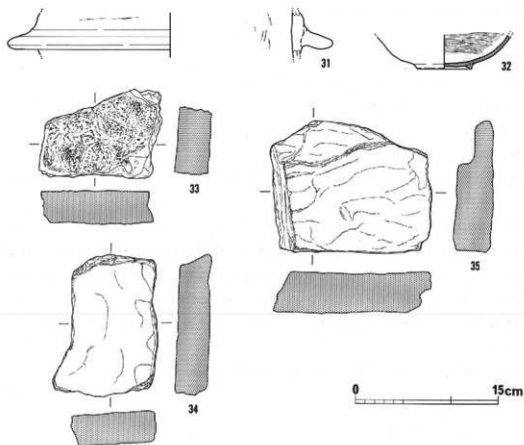


図7 南トレンチ瓦溜まり遺構 SX-01出土遺物2 (S=1/4)

11は、布留傾向甕である。直線的にのびた後、端部を上方につまみ上げる口縁形態を示し、先述の10の甕より時期的に先行する特徴をもつ。

12は、高環である。脚柱部はほぼ完存しており、外面は細かいヨコヘラミガキ調整が見られ、内面には成形時のシボリ痕が残る。

13は、小型器台の坏部片である。外面に細かいヨコヘラミガキが残り、台部より剝離している部分が看取できる。

14は、小型高環の脚台部である。前記の12の小型器台と同様に細かいミガキが施される。小型精製土器類である。

15は、甕である。口縁部の小片で内面に3条の橋描き波状文が残る。

16は、高環の脚台部である。外面にはタテハケを施し、内面はナデ調整のみで、成形時のシボリ痕を残す。

17は、須恵器坏部片である。内外面ともにロクロ成形を施し、外面底部にかけてのヘラ切りが未調整である。形態的な特徴により6世紀終末から7世紀初頭と考えられる。

18・19はいずれもサヌカイト製石鏡である。(西山)

瓦葺り遺構 SX01出土遺物

20は、内区に均整唐草文、外区に大粒の珠文をもつ軒平瓦である。

21～29は平瓦である。21～24には凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕を残し、25～29は凸面をタタキの後、丁寧にナデをおこない、凹面に布目痕を残す。

26は凹面側縁部分に糸切り痕を残す。

30は軒平瓦の玉縁部分である。おそらく玉縁部と胴部が連続して形成されているものと考えられる。

31は土師質羽釜で、鈔の部分のみ残す。

32は、大和型瓦型椀である。内外面とも磨減が著しいが内面見込み部分には簡略化された連結輪状暗文とみられる痕跡がある。内面のミガキ、底部等から近江編年(近江 1991) I-4～5期に属すものと考えられ、31・32とも12世紀後半～13世紀の範疇にて捉えられる。

33は装飾を加えた可能性のある磚であるが、図案等は不明である。34も33と同じ石材の磚と考えられる。

35は、暗紫色をした石材である。石質、用途等は不明。(中山)

III まとめ

今回の調査では柳本遺跡群における古墳出現前後期の集落の一端を知ることができた。また、同時にこの地で初めて奈良・平安期の寺院関連の建物の存在も確認され、小面積の調査にもかかわらず多くの成果が得られた。この他にも、起伏に富んだ丘陵地形のなかでの土地空間利用の変遷についても各時期の遺構・遺物の在り方により大まかながらに想定可能なほどであった。

ここでは、各時期間の所絶期については無視したかたちにはなるが、当調査地内における堆積層序、出土遺物、検出遺構等の時間的な前後関係をもとに I～VI期の相対的な空間利用の期的変遷について概観し、本概報のまとめとしておきたい。

I 期

出土遺物のうちで最も時間的に遡るものとしてサヌカイト製石鏡が挙げられる。自然河道 NR01 埋土上部より微細な磨消縄文系土器片とともに出土しており、谷筋上の小河川の埋没が縄文後期頃より始まったことを示している。

II 期

南トレンチ北半の尾根筋上から低地にかけて竪穴住居群が形成され、南北30mほどの範囲に集落が展開する。方形プランの住居が占められ、出土遺物についても他地域産の搬入土器を含む庄内・

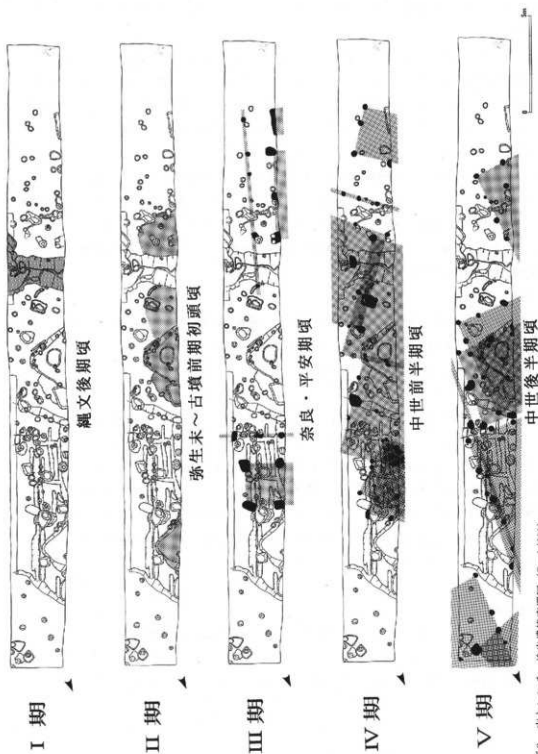


図8 南トレンチ 検出遺構配置図 (S=1/200)

布留式期の土器片が主体的な柳本遺跡群の性格付けに該当する古墳出現前後期の小集落である。

III期

南トレンチ北側の微高地上および中央の低地を挟んで南側に第Ⅳ・Ⅴ層が形成された後に建てられた掘立柱建物と櫓列がある。現在の地割に近いかたちで建物の並びが復元される。出土遺物より奈良末～平安期頃の寺院関連建物群と考えられる。中世以前にこの周辺に柳本廃寺と呼ばれる大寺院の存在したことが『大和志』に伝えられており、何らかの関連が想起されよう。

Ⅳ期

南トレンチ中央の落ち込みSO02の埋没が進み、北端の谷筋を除き居住地として均等なレベルで平坦地が成立する。このため建物群が重複して存続する。建物は谷筋の稜線に沿うような地割で並ぶ。中世前半期頃の時期が考えられるが橋本庄の領域内に該当するものと思われる。前記の柳本廃寺に伴う瓦類が廃棄された瓦溜り遺構SX01出土中世土器類により、13世紀前後の時期を上限とした時間的位置付けが考えられる。

Ⅴ期

前段階に引き続き居住地としての利用がなされる。建物の配置は方面地割に基づき一定の土地区画の規制が存在した様である。柱穴埋土より陶器類の破片の出土が目立つことから、これらの建物が16世紀代末期には廃絶していたものと思われる。

Ⅵ期

前段階までの居住地としての土地利用から一変して耕作地として変貌する。現在の地割と同様の方向性をもって南北に長い素掘り小溝群が形成され、近現代に至るまで農耕が続く。

以上のように、今回の調査より知り得た事柄をもとに土地利用の変遷案を提示したが、各々の画期としての時期設定については少量の出土遺物により決定せざるを得なかったため多少の無理な点も無いとは言えない。しかしながら、中世以降については当調査地周辺における想定寺院跡（柳本廃寺）から橋本氏による支配体制に係る地割の変容などを考古学的調査による成果と対照して考えられたことが一つの成果と言えよう。

【参考文献】

- 泉武1982 「天理市アンド山遺跡発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報1980年度
奈良県立橿原考古学研究所編
- 近江俊秀1991 「大和型瓦器編の編年と実年代の再検討」古代文化第43巻10号

長寺遺跡（第15次調査）

場 所 天理市樺本町

調査期間 平成8年5月15日～6月21日

担 当 者 天理市教育委員会 松本洋明

1. はじめに

天理市の北部、樺本町から檜町にかけて所在する長寺遺跡は、近年、宅地開発が進みつつある。天理市教育委員会では、開発が目立つ長寺遺跡に対して国庫補助調査をおこない、数年前から事前の文化財調査を実施している。第15次調査は、JR桜井線の樺本駅から北東300m、天理市立樺本幼稚園の西側で宅地建築にともなう事前の文化財調査を実施したものである。調査区は、南北13m、東西8.5m（面積110.5㎡）で設定した。なお平成8年5月25日に天理市教育委員会で企画する“市民のふれあい事業”の一貫として、一般の方々による発掘調査の体験学習をおこなっている。



図9 長寺遺跡の調査地点図 (S=1/2500) 数字は調査次数を示す

2. 調査結果

調査で検出した遺構は、弥生時代から奈良・平安時代にわたる。弥生時代は、調査区の中央部で弥生時代中期（大和第三・IV様式）の遺構・SK-01～06と他に土坑を検出している。そのうちSK-01・04・05は井戸遺構と思われる、SK-02・03・06は土坑である。調査地点の西側隣接地でおこなった第8次調査では、弥生時代中期の土坑やPitを多数検出しており、調査地点の一角が集落の居住域と推測される。またSK-04の井戸底からは、中期（大和第四様式）の無頸壺が蓋付きの完形品で出土している。古墳時代の遺構は、SD-01溝で、第8次調査で検出したSD-19の延長にあたる。溝から古墳時代後期の土師器が出土している。SD-04小溝は、SD-01につながっている。調査区の南東部で検出したSD-02は、第14次調査で確認している長寺廃寺の北辺区画溝（第14次調査・SD-01溝）の一部がかかっていたものと思われる。溝からは、奈良時代の平瓦破片が出土している。また調査区の北半で検出したSD-03溝は、出土遺物が希であるが、長寺廃寺の北辺区画溝との関係が察せられ、奈良・平安時代の溝と思われる。第15次調査から出土した遺物の大半は弥生時代中期の土器破片である。古墳時代後期のSD-01溝から金環1点が出土している。

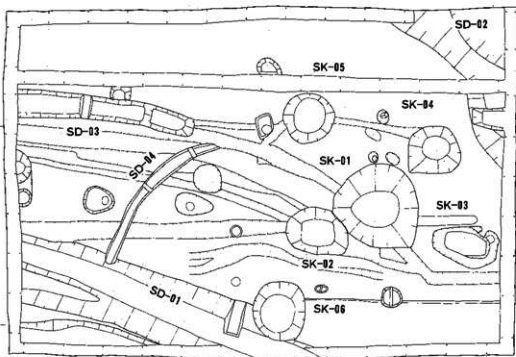


図10 長寺遺跡（第15調査）調査区平面図（S=1/100）

成願寺遺跡 (大和古墳群)

場 所 天理市成願寺町
 調査期間 平成9年2月3日～2月7日
 担 当 者 天理市教育委員会 松本洋明



図11 調査地点位置図 (S=1/10000) 上方北

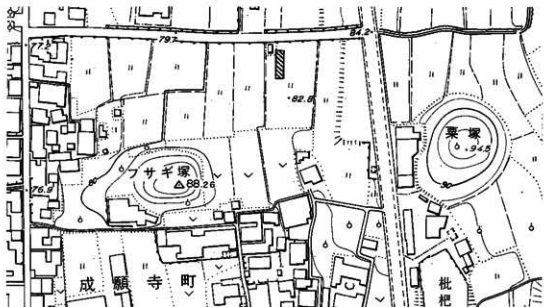


図12 調査地点位置図 (S=1/2500) 上方北
 斜線部分が調査区

1. はじめに

天理市の南部、奈良盆地の東山麓（竜王山山麓）に位置する成願寺町は、前期古墳のメッカで知られる大和古墳群が所在地している。調査地点は、大和古墳群の中央部に位置し、JR桜井線・長柄駅から東方800m、フサギ塚古墳の北東側近接地で、宅地建築が実施されるため事前の発掘調査を実施したものである。東山麓からのびる標高82m前後の扇状地帯に位置する調査地点は耕作地であったが、栗塚古墳やフサギ塚古墳に近いため、大和古墳群に関わる遺跡の所在が十分に測された。調査区は、宅地建設予定地に南北20m、東西4mのトレンチ（面積80㎡）を設定し、重機を利用して遺構の検出をこころみた。

2. 調査の概要

a) 遺構

遺構は、耕作土の表面から深さ40cmのところまで砂礫層を検出し、旧地形の痕跡を留めた自然流路の跡を確認した。この砂礫層は調査区の中央部から南方に広がっており、トレンチでは自然流路の北岸を検出したものであった。調査では、トレンチの中央部で自然流路の上層に堆積した古墳時代初頭（庄内期）の砂礫層を検出し、幅6m、検出した深さ50mの上層部分のみ掘り下げを実施した。流路の北岸付近には岩石がみられ、かつては河原石がおびただしくかかっていたものと思われる。推測ではあるが、栗塚古墳とフサギ塚古墳の北側を西方に流れる浅い谷筋地形が存在していたものと考えられる。また流路の北岸には、淡黒灰色細砂層があり、自然流路の基盤層を形成していた。同淡黒灰色細砂層には、縄文晩期土器が含まれていた。遺構については不明である。

b) 出土遺物

調査で出土した遺物は、主に土器類である。自然流路の上層に堆積していた砂礫層からは、庄内期の壺や甕、鉢などの破片がコンテナ一箱分ほど出土し、出土量は比較的多いと思われる。時期的には大和古墳群出現期と推測され、出土した土器類と古墳群との関係については定かでない。また自然流路の北岸基盤層である淡黒灰色細砂層から出土した縄文晩期土器は、滋賀里Ⅲ式の浅鉢や深鉢、長原式の深鉢類が局部的にはあるが、少量出土している。縄文晩期遺跡の様子についても定かでない。

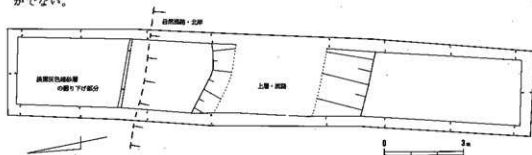


図13 調査トレンチ平面図



南トレンチ
調査前全景
(北から)



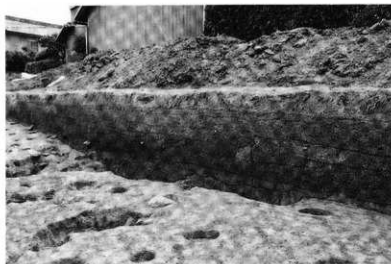
南トレンチ
掘削風景
(南から)



南トレンチ
調査風景
(南から)



南トレンチ
北半柱穴群
(南から)



南トレンチ中央
東壁土層断面
(南西から)



南トレンチ南半
東壁土層断面
(北西から)



南トレンチ中央
遺構検出状況
(北東から)



南トレンチ全景
(北から)



南トレンチ全景
(南から)

図版4 柳本遺跡群
アノ下山地点



北トレンチ
調査前全景
(南から)



北トレンチ
土坑 SKOI
遺物出土状況
(北から)



北トレンチ
全景
(南から)



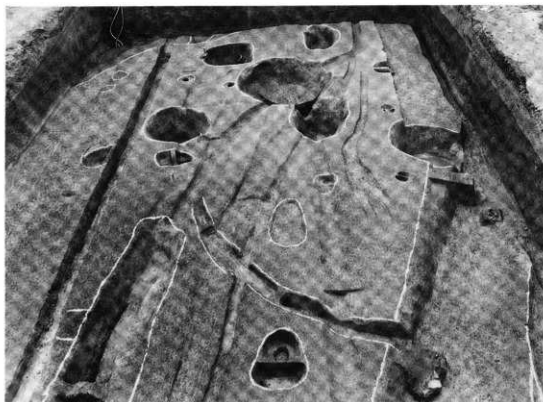
素掘り溝の検出
(北から)



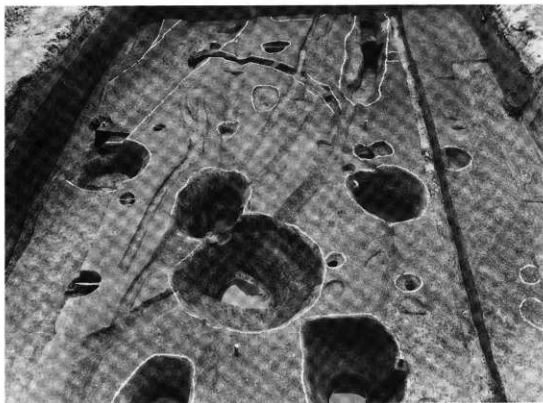
弥生～古墳時代の
遺構検出
(北から)



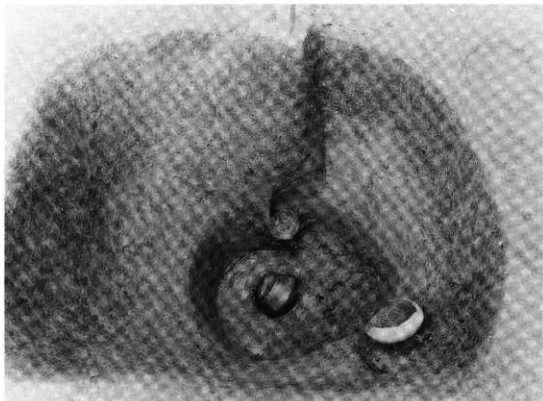
遺構の掘り下げ
(北から)



調査区全景 (北から)



調査区全景 (南から)



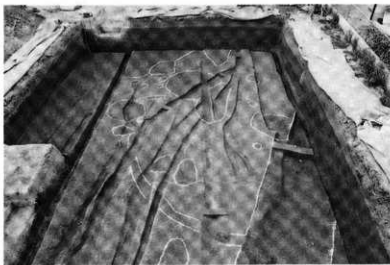
SK-04井戸遺構（西から）



SK-01井戸遺構（南から）



調査区全景
（北から）



調査区全景
（南から）



上層遺跡
（南から）

平成9年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成8年度・国庫補助調査)

柳本遺跡群 アンド山地点

長寺遺跡 (第15次)

成願寺遺跡 (大和古墳群)

発行	天理市教育委員会
編集	天理市川原城町605番地
印刷	天理時報社
	天理市稲葉町80番地